

六 花



11

俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

卒^す塔^つ婆^うの背なかを秋の没日かな

よい温泉（兵庫県宍粟市与位）十三句

電線のにじんで見ゆる野分かな
かつぼれを松に踊らす秋の風
朴の葉に打たれさうなる秋の蝶
白鷺の秋日に透けて飛び去りぬ
木の実降る林の中の駐車場
秋寂やよい温泉をひとり占め
秋の鳶高みは風のなきごとく
稜線を際立て天も秋雲も
あのとぎの家鴨三羽や秋日中
湯上がりの人秋灯に確かむる
初紅葉置かば波立つ外湯かな
長湯せし足風におく秋の暮

迷鳥の己が和毛にうづくまる

氷上ひかみあたり一句

コスモスを泳いで来たる匂ひかな
秋灯や赤地鴛鴦唐草文錦
一行のどうにも読めぬ夜長かな
櫂の舟奥へ奥へと霧の声
秋簾はづす三枚四枚かな
暫くは手計りに置く長十郎
指先の血玉すつぽし秋薔薇
この湖を空と見まごう渡り鳥
稜線の肩より突如渡り鳥
秋灯にめくれればぽろと酸性紙
かこばすでコスモス巡りでもせむか
待宵や猫舌で猫顔洗ひ
水硬く呑みたる冬の初めかな
追ふ方も追はるる方も秋の蝶

Rこう会(明石城公園9月吟行)三十苦

秋さうび推したり敲いたり ②

大楠の上を過ぎ行く秋彼岸
露草はつゆむらさきの夢のいろ
秋薔薇風吹き止めば肌色に
彼岸花群れて咲かざる森の奥
靴下の上から秋の蚊に刺さる
落枝を踏みゆく杜の霧深し
大樹の枝覆ひ被さる秋の空
渡り鳥すとんと森にはげ地あり
秋薔薇にクラリネットのピエロかな
木の实降る柵の向うの土崩れ
みんみんの鳴き通すすべ知らぬなり
秋涼や森の明るきひとところ
秋天の雲広がりし淡さかな
森の上森の中へと小鳥来る

宵月の人の足跡名残りかな
うつむかば香り高かり秋薔薇
秋の蚊ぞ指の間を刺し来るは
木斛の実をしげしげと見定めぬ
飛び石の右へ進まば秋薔薇
刺されてもよからむ秋の紅薔薇なら
化粧などいらぬと香る秋薔薇
鵲鴿の遊ぶ土俵の徳俵
秋薔薇紅の匂ひの淡かりき
老いの手で握りつぶせし笑苺
船笛に秋のきざしの背後より
わくらばに秋風の吹き初めにけり
こほろぎに城の石垣ゆるぎなし
蟋蟀や城の深井の水ゆたか
夏落葉かと訊かれけり口ごもる
毒茸の話聴きつつ句を選む

三回忌

遺作雪華抄 秋の雨

ことり

はばたいてゆくには強し秋の雨

日差しなき有馬もよかり秋の膳

梨かむや身のすみずみの潤ひぬ

ふりかへりふりかへりして秋の滝

庭と呼ぶよりも秋の野とぞ呼ばむ

経る時を今はいふなよ秋の宴

ぬかごとはかくなる味か宿の膳

ほのぼのとせし秋霖もあるものよ

寝ころびてしまふもよけれ秋の宴

松茸の足うるはしや一口に

のどごしを楽しむ酒や秋の雨

身の内に秋の実りをとりいれし

むつくらと口開けて出づ秋の鯉

礼儀なぞ忘れましたわ秋の宴

目を誘ふうす紅葉かな露天の湯

路面から霧たちのぼる有馬かな

物の音澄むや雨降る山もまた

湧き出づる湯にをり秋の雨の中

山の湯にふくまれてゆく秋の雨

をみなどは嬉しきことよ秋の宴

湯の山やせきれいの声ほそかりき

んたんたたた秋の滝道下りけり

夜中までをりたかりけり月みたし

新しき靴や色なき風のなか

らふそくのような我が身や秋の宴

せわしなく梢にうごく秋日かな

竜胆のつぼみの濃くて有馬山

こすもすの日差しを包みをりしかな

瑠璃落つとみれば露草なりにけり

秋桜はなびらの影はなびらへ

秋天を目薬にしてをりにけり
紅色のひとすぢ白きなでしこに
日だまりや白こすもすの真ん中に
羽衣のたなびいてをり秋の空
爽籟に目を閉ぢ足を止めにつけり
金風や梢は日差しちらつかせ
秋桜やさしくつよくしなりけり
青天や揺れつづけたる秋桜
爽籟や今にも空へ舞へさうな



峰雲を凌ぐ峰雲ありにけり

市川伊團次

峰雲の峰を飛び交ふ小鳶かな

蝸^{ざり}蛄^がの料理手伝ひ手の震へ

枝付きの栗を机の端に置く

かなかなの声に紛れて父の声

みねぐもをしのぐみねぐもありにけり いちかわいだんじ

堂々とした格調とスケールの大きさに溢れる。あの大きな積乱雲のその上を行く雲の峰がそびえ立っていると感激。上には上があるという感慨も含めて。理屈では雲が立てる上限があるのは解ってるけれど、その雄々しき姿に、その上の天をも押し広げるほどの大きなエネルギーを峰雲にもらっている。そういうスケールの大きい物を表現したのが「峰雲を凌ぐ」である。大いなるものに触れると気持ちまでも大きくなってくるように思える。と同時に人間社会の小ささも見えて来る。星野哲郎の詩、足摺岬に「こい世間は吹つとぶぞ」という歌詞がある。こういう句には、人はときどき大きなものに触れるべきだと思わせられる。

雪 卿 集

シヤワー

松本文一郎

カップルの交互に啜るソーダ水
かき氷一匙ごとに顔しかむ
音立てて暑さを飛ばす夜のシヤワー
炎天や鉄錆匂ふ無人駅
風鈴や風の通ひ路つきとめぬ

蓑踊り

貝森光洋

蓑踊りありし国なり毛虫焼く
お得意はモンローウオーク尺取虫
何尺も数えて尺取虫老ゆる
網戸一枚隔てて女は別の女
でで虫の気持ちで人生歩むべし

雪 卿 集

真 顔
笹村 政子

虫籠をのぞく漢の真顔かな
打水のための汲み置き沸いてをり
塩飴に口の潤ふ極暑かな
姿見を磨きておはす生身魂
障子洗ふ母の踝まぶしかり

目 高
永田万年青

水槽に数の合はざる目高の子
帰宅の子まづは目高に挨拶す
近づかば瞬時に消える目高かな
目高の子米粒に尾をつけしごと
目高の目顔いつばいにけり

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

花 火 出口 誠

ハンカチを口に当てつつ花火待つ
夏の虫向うの窓を発ちにけり
片陰の個性的なる屋敷町
雲の峰山の傾斜に生まれけり
朝顔の支への柵を葉で覆ふ

夜の秋 藤生不二男

夜の秋はらりと落ちし葉かな
その中に一声のあり蝉時雨
溝川の流れの迅き目高かな
旧道に入りたるより草いきれ
真葛原踏み入るほどに深まり来

蛍雪譚



六甲選

俳句は詞の切れ者

二十五年十一月号選後に

カップルの交互に啜るソーダ水

松本文一郎

カップルというのは、ラテン語で「結びつき」を意味する *copula* (コプラ) に由来するのだそうだ。この言葉はフランス語の *couple* (クプル) から英語に伝わった *couple* (カップル) となった。本来は、一組になった二つのもの (一対) 全般を意味する。もともと、特に一組の男女という意味はないんだって。でもわれわれ日本人にはカップルといえば男女をすぐにイメージするほどの外来語だが、日本人は中国語の漢字を取り込んだように外国語を日常に取り込む才能に長けている民族だからカップルという言葉はもう日本語と言ってもおかしくないけど可笑しいよね。可笑しいというのは笑っちゃうよという可笑しさだけど、選者の言うおかしいというのは疑問ですよという意味。むむむ「おかしい」というのはどうしてかな? と思い始めたらもう止まらない。サウナ癖のついた汗かきみたいなもの。でもここで道草は出来ないから「おかしい」について詳しく知りたい方は言語由来辞典でも紐解いてみてね。ところでこの作品、もし恋人同士でなかったらこんなこと出来ると思う? 妻でも嫌だよ。ちがうって? ごめんごめん。愛する奥様だからこそ出来るんだよ。ね。やっぱりカップルとは一対の男女なんだ。昔はストロー二本で同時に一つのグラスからソーダ水を啜り合っていたっけ。今は長いデフレスパイラルでストローも一本に節約しているのね。でもこういう題材はすでにあつたような気がするから確かめてね。

六花集

独り焚く門火の煙に囚れて
曝しつつかまた読む父の従軍記
大津絵や紙魚の跡さへ面白く
熱帯夜の雷魚音立て向きを
新刊の帯解きぬる夜の秋

升田ヤス子

形代や良き墨の香とつぶやきて
後翅昼み直して天道を
白手拭沈めて目高来るを待つ
芝刈るや埃のごとく葉の縮み
磨き盆はたく仏具もありにけり

池田喜代持

伏す妻の線香花火戯るる
プールまで家出すごと持ちゆけり
墓洗ふ塩噴く腕黒光り
蟬時雨スマホで手真似測量
輪め中で喜怒哀と哀楽蟬時雨